

『古代アメリカ』 8, 2005 pp.31-39

## <調査報告>

# インカ国家の行政センター・エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査 (第2次)

大平秀一

(東海大学)

## 1. はじめに

ソレダー (Soledad) 遺跡は、エクアドル南部のアンデス山脈西斜面、標高約 1800m の地点に位置するインカ国家の行政センターである<sup>1)</sup>。同遺跡の北東約 55km には、インカ国家北方領域における中心都市トメバンバが位置し、西方にはムユ (スポンディルス貝) の採取が可能なエクアドル海岸部が広がっている<sup>2)</sup> (図 1)。

トメバンバと海岸部の間には、これまでの調査により、フボーンネス谷の北側を通る新たな一本のルートが確認されつつある。ソレダー遺跡は、東方約 6km に位置するミラドル・デ・ムユプンゴ遺跡 (3200m) と同様に、このルート上の拠点であったと考えられる。ムユプンゴ遺跡ならびにソレダー遺跡周辺域には、海岸に向う複数のインカ道をはじめ、多くの水をめぐる施設 (バーニョ・デル・インカ、カナル)、聖なる岩 (ワカ) を伴う畑、信仰・崇拝の対象となっていた丘上の基壇・テラスなど、インカ国家によって建設された諸施設が配されている[大平 2003] (図 1)。この領域は、海岸部において大きな権力を有していたプナ、同様にムユの採取・輸出を統御していたと考えられているマンテーニョ (サランゴ) などと密接に関係するゾーンと想定され、インカ国家によるエクアドル海岸部の支配・統合をめぐる諸相を考察する上で、重要な地域といえる。また上述したように、遺跡周辺域にはインカ国家によって整備・使用されていたと判断される複数の畑地が認められることから、農地としての重要性も示唆される。

ソレダー遺跡の第2次発掘調査は、2004年8～9月の約1ヶ月間にわたって実施された。本調査プロジェクトのメンバーは、筆者に加えて、早稲田大学文学学術院助手の森下壽典、エクアドル・カトリカ大学ヒホン・イ・カアマーニョ博物館のバイロン・カミーノとオスカル・マノサルパスの4名で、東海大学文学部学生3名も一部の期間現地参加した。調査の対象とした地区は、インカ時代の広場の北方に位置するテラス群ならびに同地区で検出された土壌 (墓) で、発掘面積は総計約 420 平米におよんだ。また短期間ではあったが、周辺における一般調査も実施した。以下に、調査で得られた成果の概要を報告する。

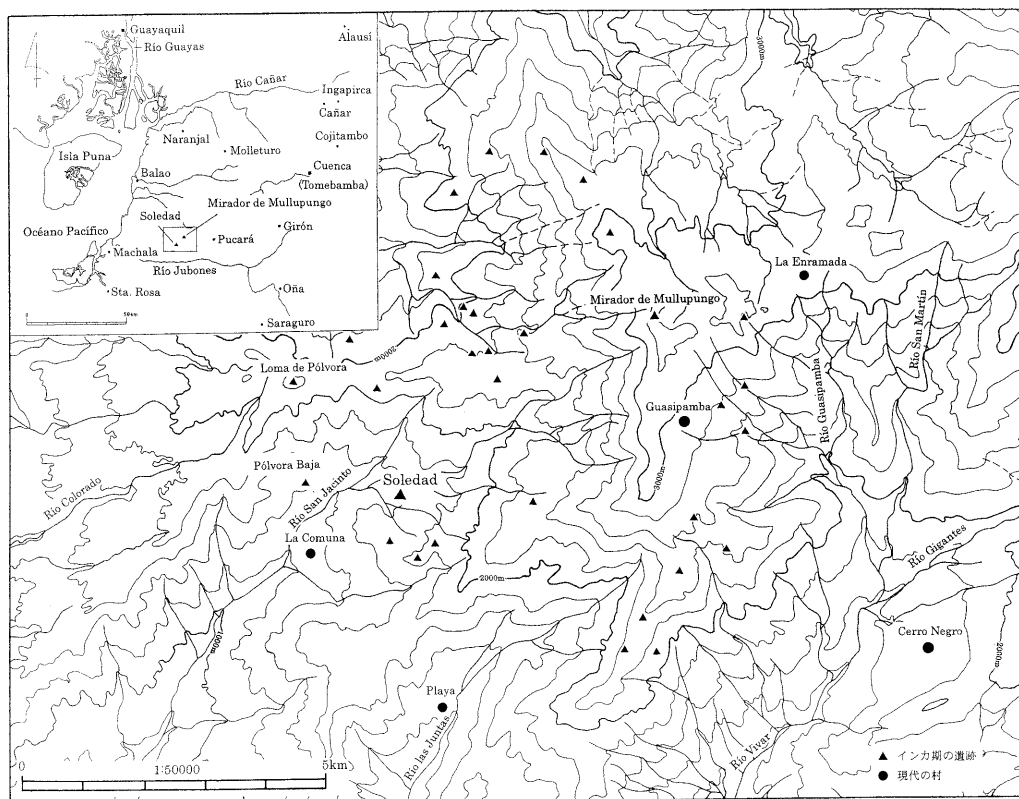


図1 エクアドル南部全図・調査地周辺図

## 2. テラス群の発掘

発掘を実施したテラス群は、尾根上に構築された広場から、北側に向下る斜面上に位置している。このロケーションは、広場北西方向に連続する聖なる丘の東斜面にも相当することになる。テラス群の配された斜面下方には、湿地帯ならびに大型の岩を取り巻く儀礼空間が認められ、テラス群はこれらを見下ろしていることになる。

テラス群の認められる地区において、表土に露出していた遺構は、儀礼的意味合いをもって加工された岩、水をめぐる施設の一部であったと想定される連続的に配された方形の掘り込みのみで、土留めの壁を除けばテラス上にはいかなる遺構も認められなかった<sup>3)</sup>。しかしながら、表面採集遺物の特徴より、テラスからは住居址が検出されるものと想定された。すでに発掘調査を実施しているムユンゴ遺跡において、建設労働者の住居址をめぐるデータが得られているため、発掘の主目的はこれと比較・対照する資料を得ることにあつた。

発掘の対象としたテラスは、隣接し合うテラス1とテラス2、そしてこれらの南方約45mの地点に位置するテラス3の3枚である。まずテラス3では、表土下10-15cmのレベルより、こげ茶色土に石灰岩質の小塊を混入させて構築した床面が検出された。この床面の直上からは、直径約50cm、厚さ約3cm程度の薄い灰の堆積が確認されたものの、床に伴う建造物の基礎部あるいは柱穴等は検

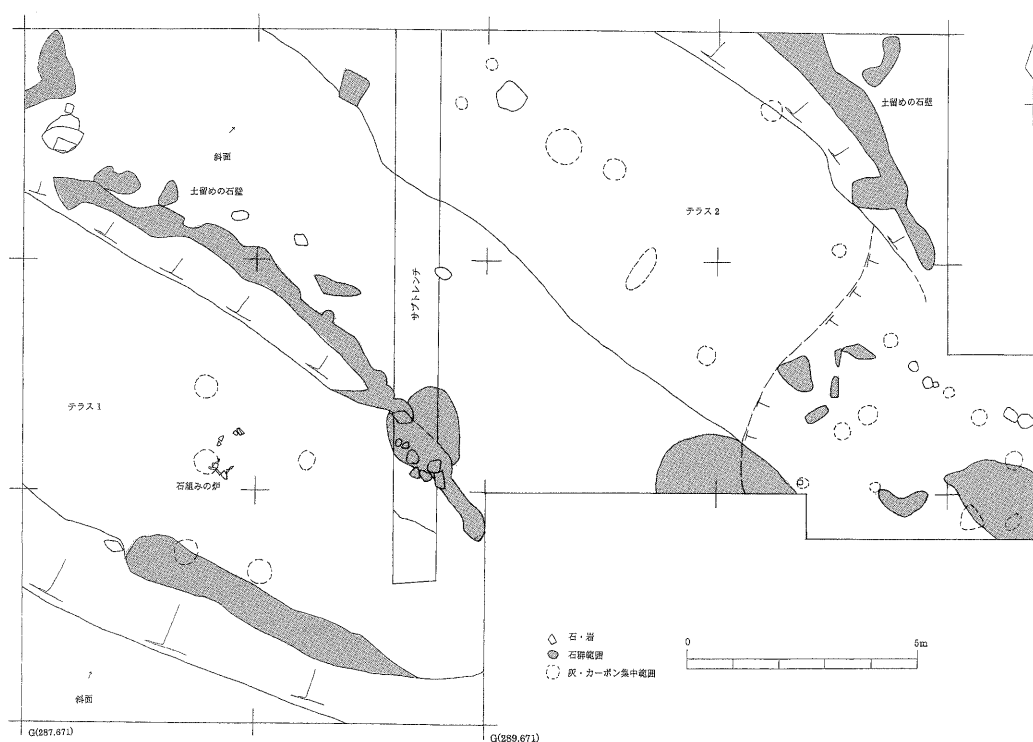


図2 テラス1および2の床面検出状況

出されなかった。この床の構築層は、およそ 15～30cm 程度の厚さを有し、その下層には遺物を包含しない黄褐色の自然堆積土が確認された。床の構築層中には、比較的多くの土器片が含まれていたものの、その内部に別の床面は認められなかった。

一方、テラス1と2においては、やはり表土下 10cm～15cm のレベルで、テラス3と同様の特徴をもつ床面が確認され、その直上には灰やカーボンの集中が多く検出された（図2、写真1,3）。ただしこれらの集中は、テラス3と同様、厚さが 3cm にも満たない薄いもので、極めて短期間のみ利用されたことが明らかである。テラス2では、石組を伴う炉も検出されたが、灰やカーボンがほとんど認められず、やはり使用のスパンが極端に短いものと判断された（写真2）。こうした生活痕を除くと、石積みの壁体基礎部や明瞭な柱穴等の遺構は検出されなかったため、生活・居住に伴う構築物は、極めて簡易的なものであったと想定される。

これらの床面の構築状況を確認するために、まずトレンチを設定して層位の確認を行った。この結果、床の構築層はおよそ 15～30cm 程度堆積しており、その中には別の床面は認められなかった。その後、この構築層を面的に掘り下げたところ、比較的多くの土器片が出土し、複数の石集中も検出された。土器片に関しては、床面に伴う生活の痕跡ではなく、床面構築に際して、混入したかあるいは意図的に投げ込まれたものと想定される。また、一部で床面上にも露出していた石集中は、下層から連続する堆積であることが明らかとなった（写真4）。石集中の基部と同レベルにおいて、テラス1東端からは円形カナル、テラス2南端からは一部に方形プランの石列を伴う掘り込みが検出された（図3、写真5,6）。後者は、おそらくバーニョ・デル・インカと想定され、一連の水をめ



図3 床構築層下の円形カナルとバーニョ・デル・インカ（建設途上）

ぐる施設を建設しようとしたものと考えられる。しかしながら、これらの施設の連続性を示すカナル等の遺構は確認されず、建設途上であったかあるいは人工的破壊を受けたものと判断される。このようなコンテキストからすれば、床面構築層中で検出された石集中も、水をめぐる施設の建材として捉えることも可能であろう。

以上のような状況より、テラス1と2では、最初に水をめぐる施設の建設を手がけたものの、何らかの理由でこれを断念し、その上に床面を構築して簡易的な構築物に短期間生活・居住して、その後に遺跡が放棄されたという一連の史的プロセスを明瞭に認めることが可能であろう。下層から上層まで、連続して同質のインカ期の土器片が出土するため、こうした一連の動きは、インカ期において生じたことが明らかである。ムユンゴ周辺域におけるインカのオキュペイションは、おそらく60年にも満たない。こうした短いスパンの中で、明瞭な2時期が確認されたことは大きな成果の一つといえる。

インカが重要な施設の建設を手がけて、その施設の本来の意味とは関連性なくその上に居住し続けている状況は、ムユンゴ遺跡において、ウスヌというインカの聖壇の一部をインカ自身が破壊して別の構築物を建設し、居住し続けている状況と合致するものである[Odaira 1999, 2000]。このような同質の状況が異なる場所で認められることにより、インカ国家を急襲した極めて重大な事態は、ムユンゴ周辺全域におよぶ大規模なものであったと想定される。またその事態が一定の期間に限定されるものだったとすれば、インカ国家は、二つの行政センターを含めた一領域内の諸施設の建設を同時並行的に進めていたことも示唆される。



写真1 テラス1床面検出状況

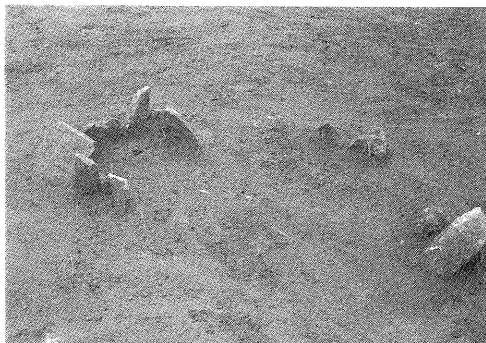


写真2 テラス1床面の石組み炉



写真3 テラス2床面検出状況

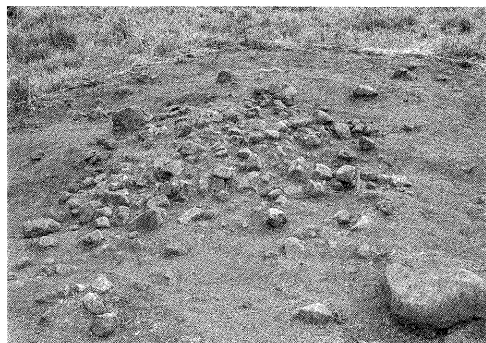


写真4 テラス1南東の石集中

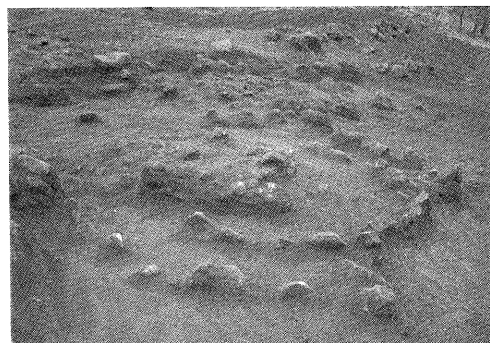


写真5 円形カナル



写真6 パーニョ・デル・インカ（建設途上）

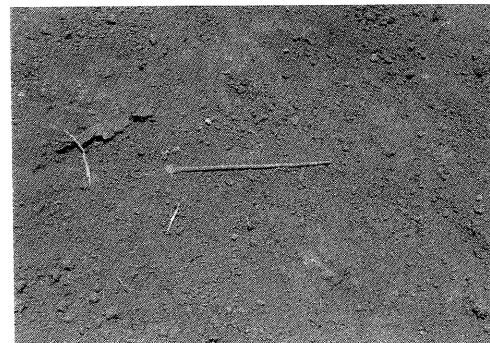


写真7 パーニョ・デル・インカ出土の金属製トゥブ



写真8 墓の石組み検出状況



写真9 墓の石蓋



写真10 墓の構築状況



写真11 歯の出土状況

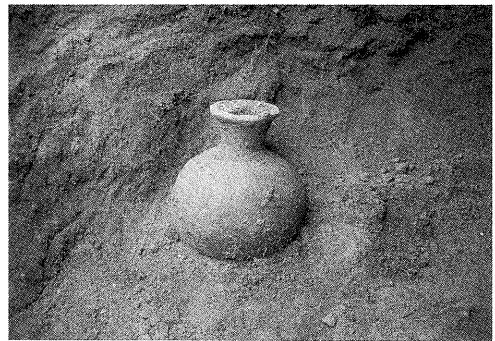


写真12 副葬品の粗製土器出土状況

遺跡を建設途中で放棄している状況は、2003 年度に発掘を実施した、ソレダー遺跡の広場東方に位置するパーニョ・デル・インカ、ならびにムユプンゴ遺跡の多様な区域においても確認されており、後者の一部では、複数の建造物に人為的破壊の痕跡が認められることから、遺跡が放棄された要因として、武力的な衝突が想定されていた[大平 2004; Odaira 1999, 2000]。ソレダー遺跡のテラス 1 と 2 で確認された状況は、こうした解釈を支持するデータといえよう。ムユプンゴ領域の西側下方に広がるグアキル湾には、プナ島が位置している。この島は、強大な政治的権力を帯びたプナ社会の領域であり、インカ時代において、その力はアンデス西斜面にも及んでいたとする指摘もある。一つの仮説的な解釈として、ムユプンゴ周辺全域を急襲した重大な事態は、インカ国家とプナ社会の武力衝突であった可能性がある。現段階において、これを証明するようなデータは遺跡から得られていないが、2004 年度の調査において、プナ社会と関連するミラグロ・ケベード様式と考えられる土器片が少数ながら出土した。今後、さらに精査していく必要がある。

3 枚のテラスから出土した遺物は、粗製土器が大半を占めている。詳細な分析はまだ実施していないものの、これらはインカ国家が労働者たちに分配していたと判断されるムユプンゴ遺跡出土の粗製土器と同質のものである。分配の基点は、おそらく同一であったと想定される。また両者の対比を通して、ムユプンゴ遺跡出土の大半の土器片が火を受けて焼けた状態にあることが再確認された。このほか、インカ国家特有の文様をもつ土器片も少数ではあったが出土したほか、大型のアリバロ片も少なくなかった。大型土器の破片は、床の構築に際して、故意に投げ込まれた可能性がある。さらに、テラス 2 下層のパーニョ・デル・インカを建設しようとした場所からは、金属製トゥ

ブが1点出土した（写真7）。テラス3では、およそ5点の紡錘車出土した。テラスがどのように利用されていたのかという点に関しては、さらなる分析が必要な段階にあるが、女性の存在をうかがわせる遺物が出土しているため、神々やインカに仕えていた、アクリヤという女性たちとの関連も考慮に入れる必要がある。

### 3. テラス群東端の土壌の発掘

調査地周辺域には、ムユブンゴ遺跡から海岸方向に向うゾーンにおいて、およそ3000～5000の土壌が構築されている。これまで複数の場所で計13基の土壌の発掘を実施してきたものの、2004年度の調査を開始する段階において、その意味を明瞭に確認できるような資料は得られていなかった。しかしながら、土壌の諸特徴より墓の可能性が極めて高いと判断され、この仮説を立証するために、さらにサンプル・データを増やしていく必要があった<sup>4)</sup>。

ソレダー遺跡では、すでに2002年において、インカ時代の広場南方に位置する丘上で2基の土壌の発掘を実施しているが、2004年度の調査区域としたテラス群においても同質の土壌が認められたため、その内の1基を発掘の対象とした。この土壌は、テラス2の東約35mの地点で検出されたもので、他のゾーンにみられるものと同様に、落ち込みならびに周囲に配された石組みの一部を表土から確認することができた。発掘を進めると、土壌の上部には、多くの石組が配されており、その下方に蓋状に配された石が検出された（写真8,9）。これを除去すると、土壌は西側下方に向かって、もう一つの空間を構築するように掘り込まれていた。これを掘り進めると、底部付近から、完形の粗製丸底壺1点、そして人骨の小片や歯が出土し、この土壌は墓であることが明らかとなった（図4、写真10,11）。出土した人骨はほとんど解けており、性別の判別にも困難が伴うものと思われる。副葬品の土器は現在分析中だが、一部にムユブンゴ遺跡出土の粗製土器と同様の特徴が見られることから、おそらくインカによって分配されていた壺の一つと想定される（写真12）。

この墓は、表土に落ち込みを伴うこと、石組みや蓋を配していること、雑に埋め戻していることなど、これまでに確認されている土壌と共通した特徴を有している。したがって、ムユブンゴから海岸方向に向かって構築されている3000～5000の土壌は、すべて墓である可能性が高まってきた。インカ国家の行政センターでは、多様な地域の共同体の出身者が一定期間の賦役に従事し、その後属している共同体に戻るため、基本的には墓が設けられないのが一般的である。したがって、行政センター周辺域における膨大な量の墓の存在は、上述したようなムユブンゴ領域に生じた武力衝突を支持するデータとなる。ただし、2004年度に検出された墓は、二つの空間を設けているという他の土壌とやや異なる特徴も認められるため、今後さらにサンプル・データを増やして検討を加えていく必要がある。

### 4. ソレダー遺跡周辺の一般調査

2004年度には、短期間ではあったが、発掘調査と同時に、ソレダー周辺の一般調査も実施した。新たに、岩陰に構築された墓（マチャイ）、信仰・崇拝の対象となっていたと明瞭に判断される割られた岩（ワカ）などが複数の場所で確認されたほか、湿地帯に面した儀礼空間も検出された。今後、

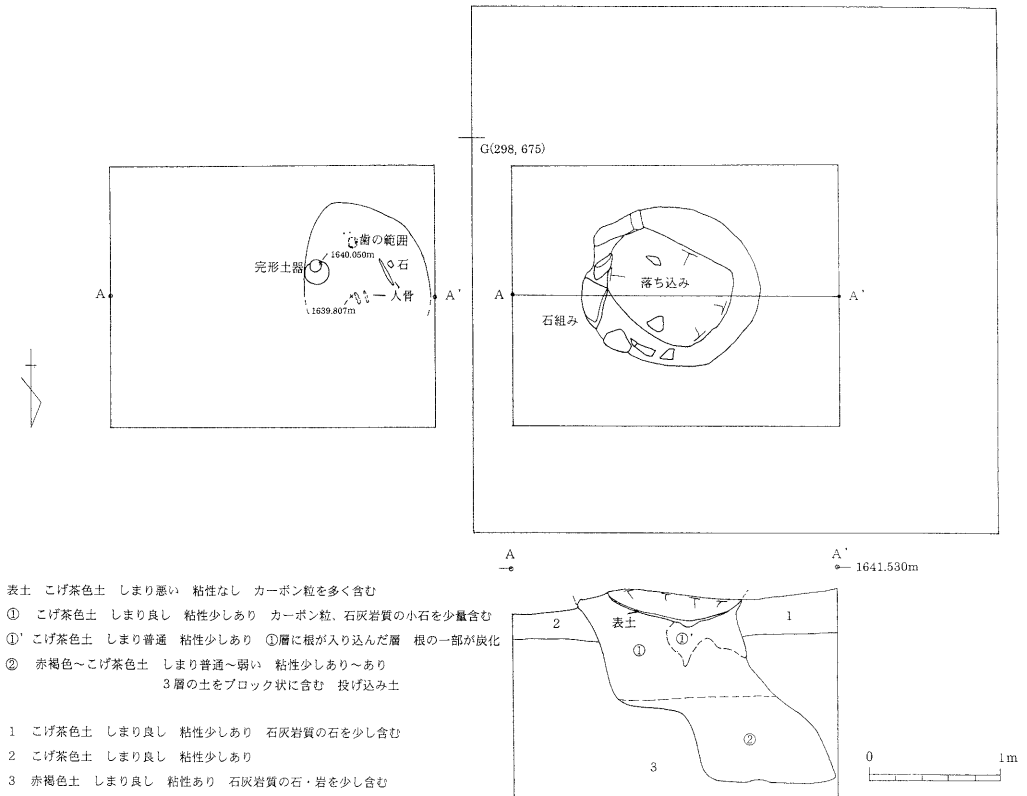


図4 墓の掘り込み確認面と断面図・人骨と副葬品の出土状況

発掘調査を加えていく必要がある。

## 5. おわりに

ソレダー遺跡の第2次調査は、ムユング領域におけるインカ国家の諸状況をさらに具体的に捉え得るデータが抽出されたという点で、極めて大きな成果を挙げることができた。同領域では、これまで10km×10km程度におよぶゾーンに調査を加え、はじめに述べたようなインカ国家の諸施設が確認されている。しかしながら、発掘調査を実施したのは、ムユング遺跡ならびにソレダー遺跡の一部にすぎない。今後、ソレダー遺跡の発掘を継続して進めることに加え、周辺の諸施設の発掘も実施していく必要がある。これにより、インカ国家とエクアドル海岸部の関係ならびに一領域内におけるインカ国家の特徴が、実証的に提示されることになるであろう。

### 【謝辞】

2004年の調査は、科学研究費補助金（基盤研究B<2>[海外学術調査]、研究課題名：「インカ国家とエクアドル南海岸域の関係をめぐる実証的研究」、研究課題番号：15401027）によって実施された。



また、日本国内におけるデータ整理・分析の実施に際して、東海大学文学部教育研究補助金を受けた。本論の図版は、早稲田大学文学学術院助手の森下壽典氏に作成していただいた。ここに銘記して、皆様に深謝申し上げます。

## 註

- 1) GPS によるソレダー遺跡の位置は、次の通りである。標高：1778m、S：03,12,42、W：079,38,23。遺跡全体は、現在のヌエベ・デ・オクトゥブレ（Nueve de Octubre）村周辺に点在した状況にある。
- 2) アンデス先住民社会におけるムユの意味ならびに諸特徴に関しては、大平（1999）を参照。
- 3) 方形の掘り込みは、広場北西方向の聖なる丘の方向から連続して配されている。おそらく、バーニョ・デル・インカを建設しようとしたものと思われる。比高差を利用して連続的に配されるバーニョ・デル・インカは、たとえばマチュピチュやサイウイテ遺跡などにも認められる。
- 4) これまで得られている土壌の特徴として、表土に落ち込みが見られること、インカ期において構築されていること、掘り込まれた面より下部において膨らんでいること、径が最大で 1m～1.5m 程度；深さが 1～2m 程度であること、石組や蓋状の石が配されていること、掘られてすぐに埋め戻されていること、基本的には内部に何らかの物質を納めた痕跡がなく貯蔵穴ではないこと、石組みあるいは蓋の上で儀礼行為を行った痕跡（火を焚いた痕跡）が認められることなどが挙げられる（大平 2003, 2004）。

## 参考文献

大平秀一

- 1999 「インカ社会と『価値の高いもの』—スポンディルス貝をめぐる—」『出光美術館館報』107号 4-28頁。
- 2003 『エクアドル南部のインカ帝国に関する実証的研究』2001-2002年度科学研究費補助金基盤C（2）成果報告書
- 2004 「エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第1次）」『古代アメリカ』第7号 85-90頁。

Odaira Shuichi

- 1999 Un Aspecto del Control Inca en la Costa sur del Ecuador: una evidencia encontrada en Mirador de Mullupungo. *Tawantinsuyu: an international journal of inka studies*, Vol.5, pp.145-152.
- 2000 Excavaciones del Mirador de Mullupungo: Nuevos datos de la relación entre la costa y los Incas. In *Estudios Latinoamericanos en Alemania y Japón*, edited by Shozo Masuda, pp.201-202, Fundación Shibusawa para el desarrollo de la Etnología, Tokyo.

